

る文様構成は両者に共通する。また、両者には網目の痕跡が明瞭に残る。1178は口縁端部が上方に伸びる広口壺の口縁部で、端部外面と上面の端部付近に細かな波状文が巡る。1186は弥生土器壺である。胴部上位には、弧の内側に複数の直線で構成される絵画が描かれている。この絵画は船と推測される。1187～1199は弥生土器甕、1200・1217～1226は弥生土器鉢、1201～1216は弥生土器高杯である。1227は弥生土器大型器台、1228は弥生土器器台で、胴部に3段の円形透孔が巡る。1229は弥生土器壺、または甕転用の紡錘車の製作途中品である。1230・1231は須恵器杯蓋、1232・1233は須恵器杯身である。

(3)時期 下層は須恵器(1230～1233)を除けば、ほぼ弥生時代後期後葉(V-4様式)を下限とする。上

下層

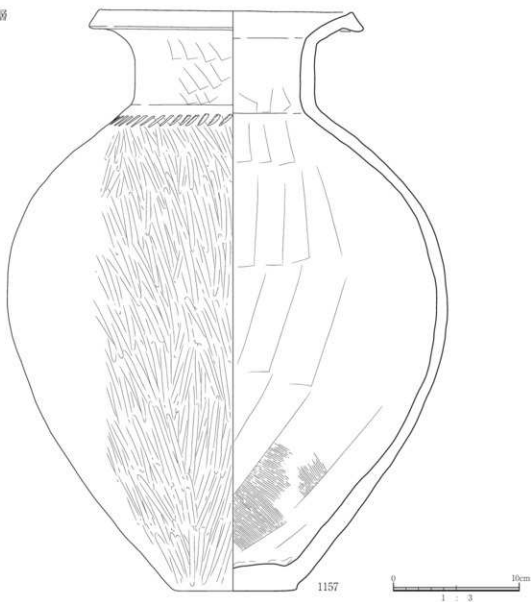


図359 SR16 出土遺物 25

下層

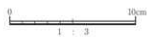
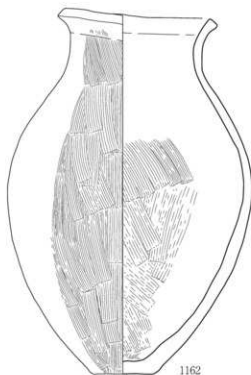
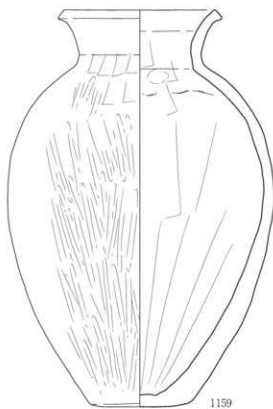
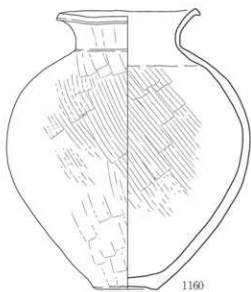
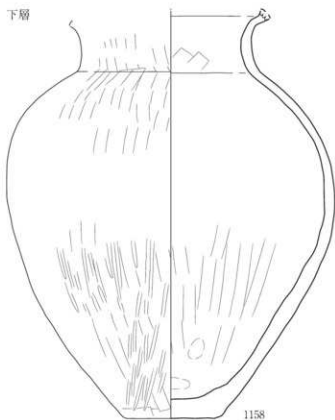


図360 SR16 出土遺物 26

下層

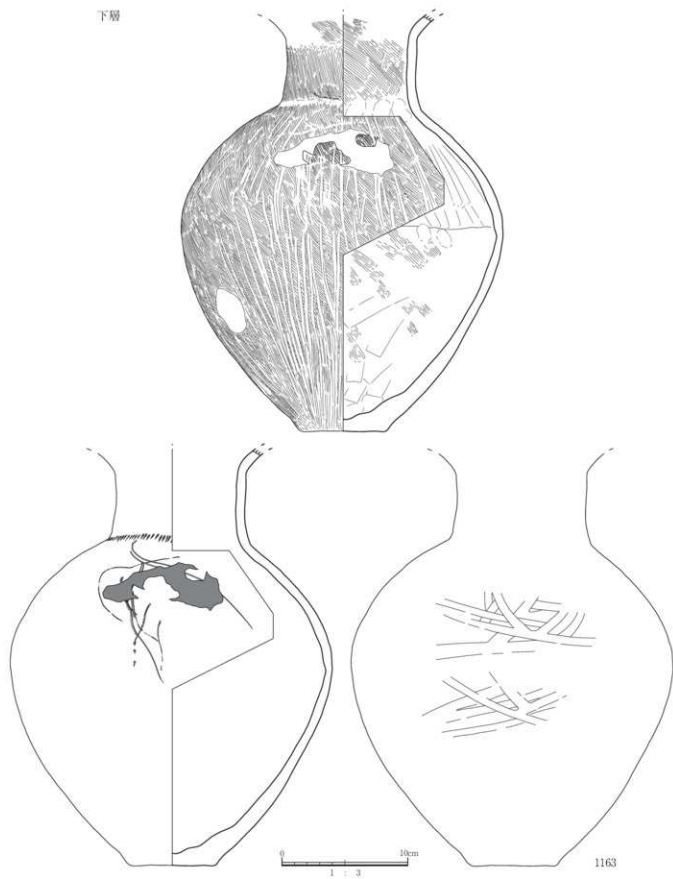


図361 SR16 出土遺物 27

下層

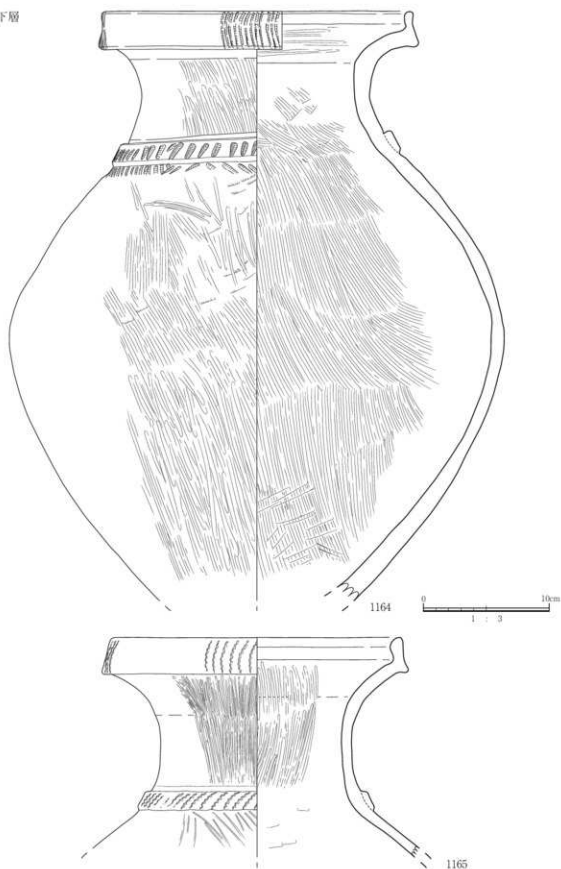


図362 SR16 出土遺物 28

下層

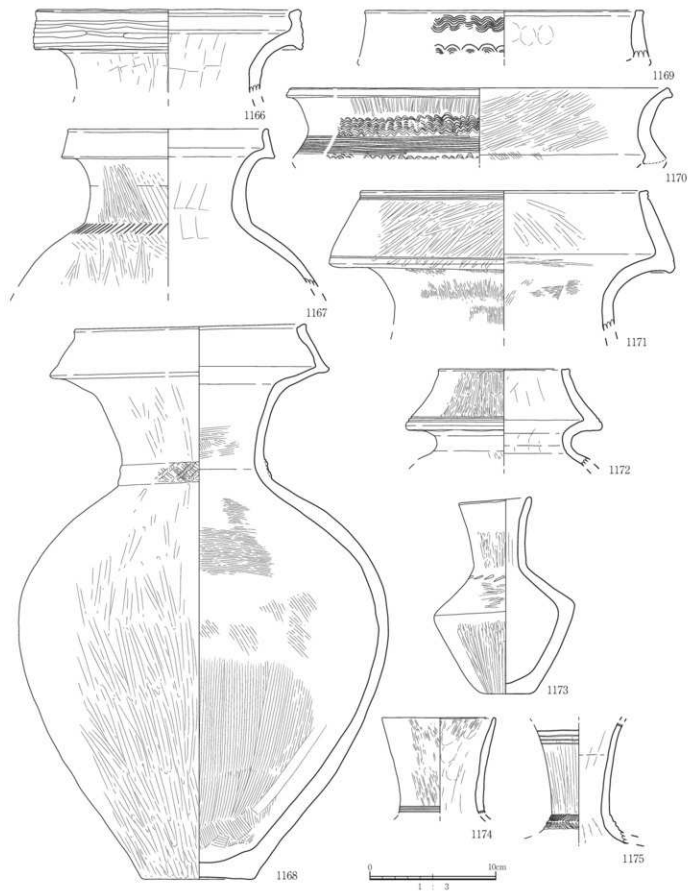


図363 SR16 出土遺物 29

層の遺物も全体的には弥生時代後期後葉(V-4様式)までを示している。須恵器を別遺構に伴うものとみて弥生時代後期後葉(V-4様式)としておきたい。

16 SR18 (12区-SR02) 浅谷1-C

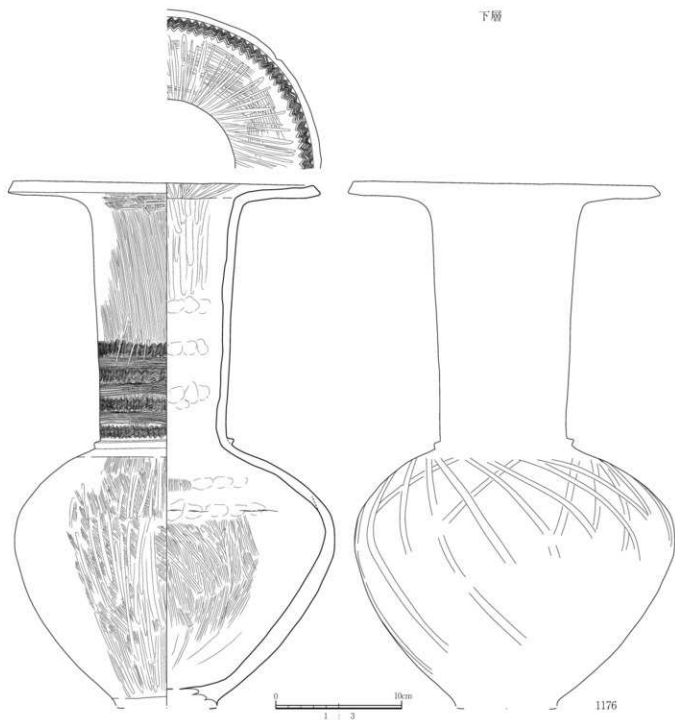


図364 SR16 出土遺物 30

(1)遺構(図373～376) 西から北東へ伸びる流路で、長軸方向はN-79° -Eである。全長が残存で27.72m、幅は12.3m～7.15m、最大深度は1.78mである。中央付近では西側底面より急激に約1m低くなるため、流路の自然地形に人の手が加えられた可能性がある。埋土はおおむね粘質土と砂質土の互層堆積である。断面c-c'の中央部分の堆積は、上位では黒色土主体であるが、18・20層付近を境にオリーブ黒色土へと変化している。流路の堆積には複数の腐植土層が認められるため、流水と滞水の時期を幾度か繰り返しつつ埋没したのであろう。SR18東側の様相については調査では明確にとらえられていないが、流路がSR11へ接続する可能性もある。古代のSE8に先行

下層

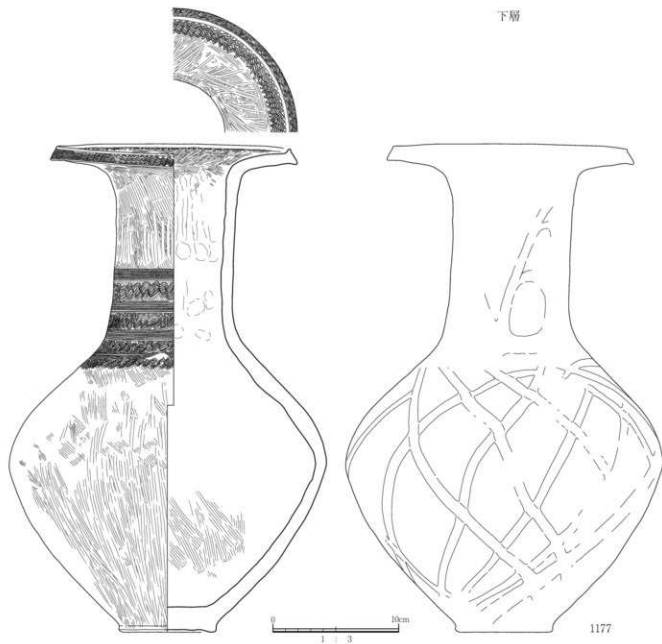


図365 SR16 出土遺物 31

下層

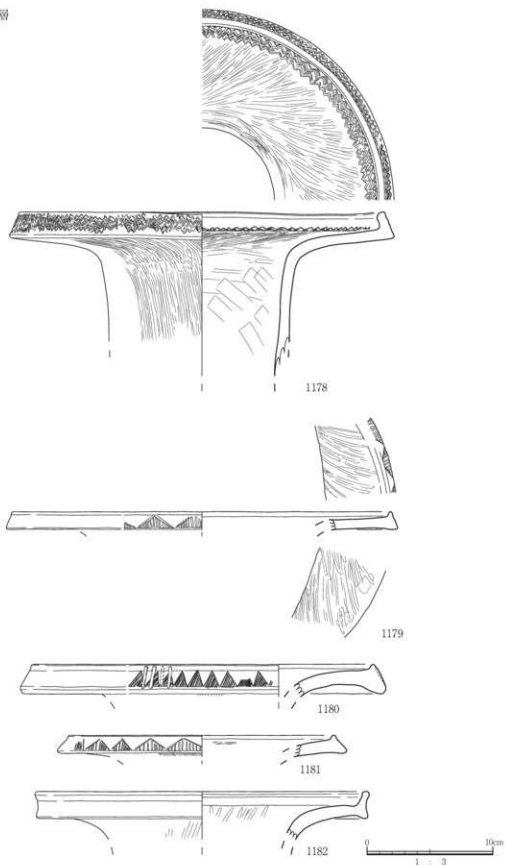


圖366 SR16 出土遺物 32

下層

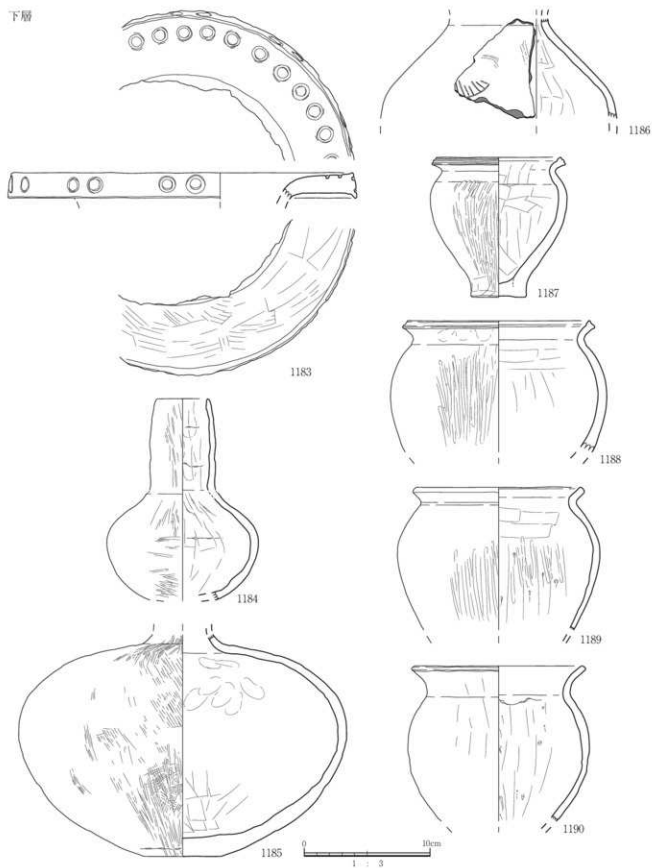
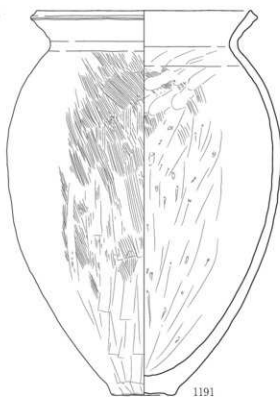
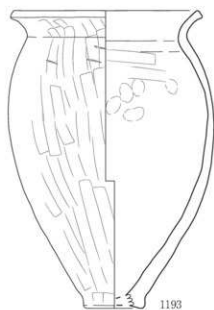


図367 SR16 出土遺物 33

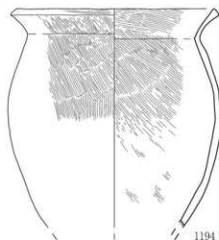
下層



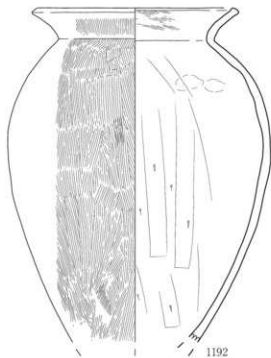
1191



1193



1194



1192



1195



図368 SR16 出土遺物 34

下層

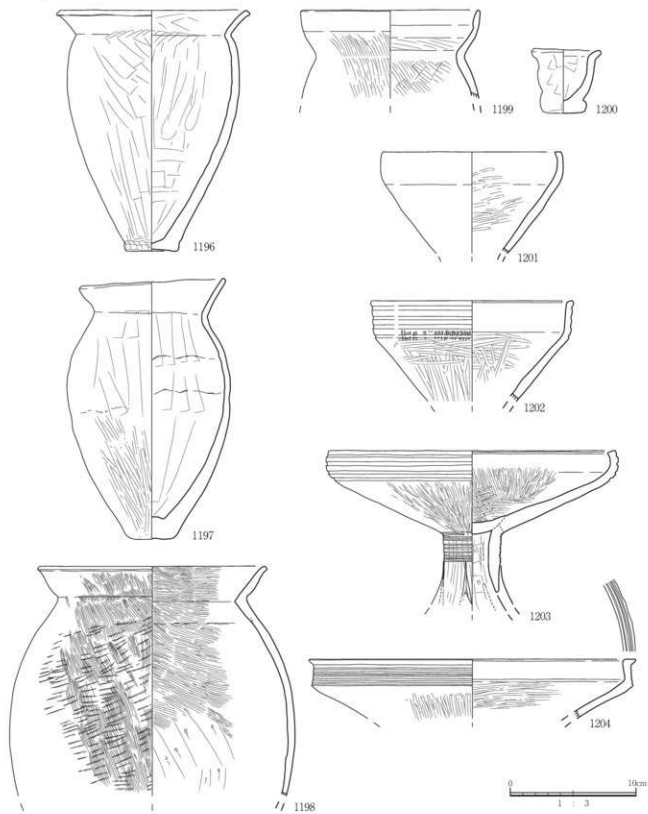


図369 SR16 出土遺物 35

下層

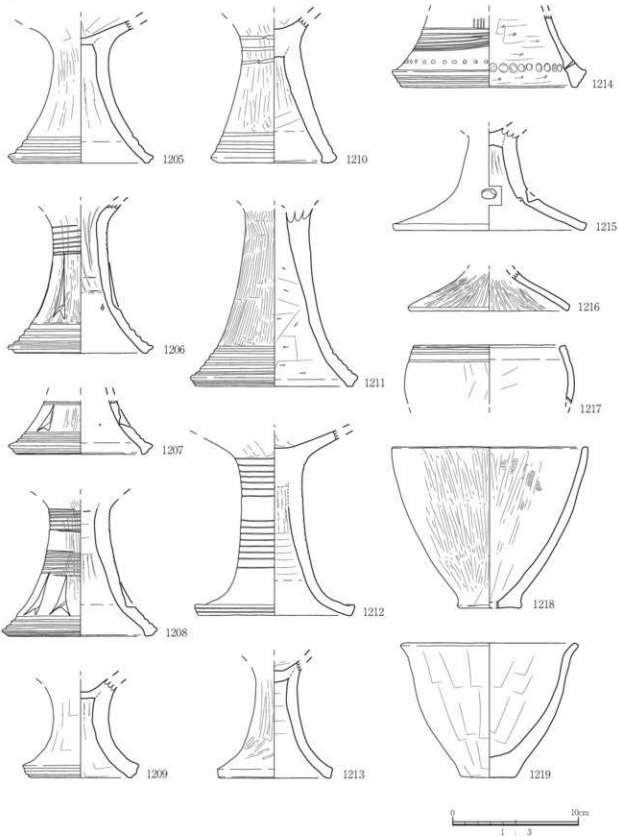


図370 SR16 出土遺物 36

下層

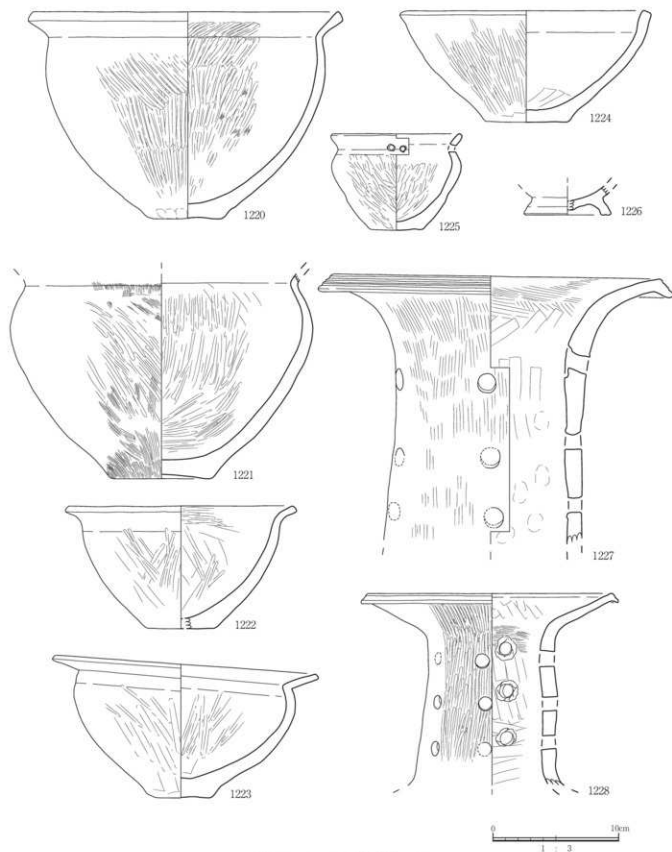


図371 SR16 出土遺物 37

下層

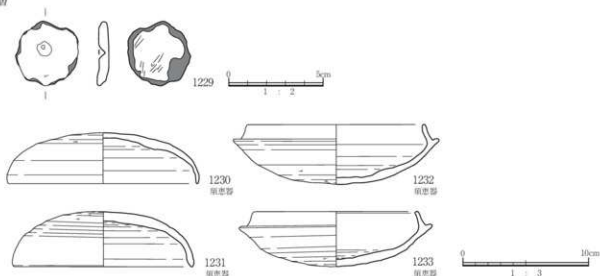


図372 SR16 出土遺物 38

する。

(2)遺物(図377～382) 弥生土器片、土師器片、須恵器片、黒色土器片、土製品、石器など2242点と木質遺物が出土した。このうち木質遺物をの除く51点を図化した。

土器 1234・1235は25層出土として取り上げた遺物であるが、断面図の層位との対応関係は不明である。1234は弥生土器甕で強いヨコナデが施されている。1235は矢羽根形透孔をもつ弥生土器高杯の脚部である。1236・1237はトレンチ1として取り上げた遺物である。1236は弥生土器台付鉢で、口縁部から鉢部上位にかけて明瞭な凹線文が巡り、口縁部には円形孔が穿たれる。弥生土器高杯1237の脚部は、透孔と縦位の沈線文の間が斜線文で充填されている。1238・1239はトレンチ2から出土した弥生土器鉢である。1240～1282は出土層位不明の遺物で、このうち1240～1247は弥生土器壺である。1240・1241は短頸広口壺で拡張する口縁部にみられる凹線文は明瞭である。1242は短頸直口壺の口縁部で、凹線文をもつ口縁部の上下端が外に拡張する。短頸壺1243の口縁部には7～8孔と推定される円形透孔が認められる。1244～1247は広口壺である。1246の頸胴部境には上下に幅の広い沈線文が施されることにより、その間が貼付突帯状になっている。1248は口縁端部外面に凹線文を伴う弥生土器甕である。1249～1254は弥生土器壺である。1249・1250は複合口縁壺である。長頸壺1254の下位には沈線文による区画内に斜線文と波状文が施される。1255～1261は弥生土器甕である。1255は逆L字状口縁を有する。沈線文は認められない。1256～1259は強いヨコナデにより口頸部境の明瞭な屈曲と口縁端部外面の1条の凹線文を伴う。底部1261には焼成前穿孔がみられる。1262～1268は弥生土器高杯である。1262は口縁端部を欠損するが、おそらく口縁部が水平に広がるタイプであろう。沈線文と凹線文で区画される脚部には2段の矢羽根形透孔が認められる。ただし、矢羽根形透孔は貫通しない。脚部1264・1265も矢羽根形透孔を有する。1267の脚端部は上方に拡張し、円形孔が上下に貫通する。1268の口縁部は、杯部

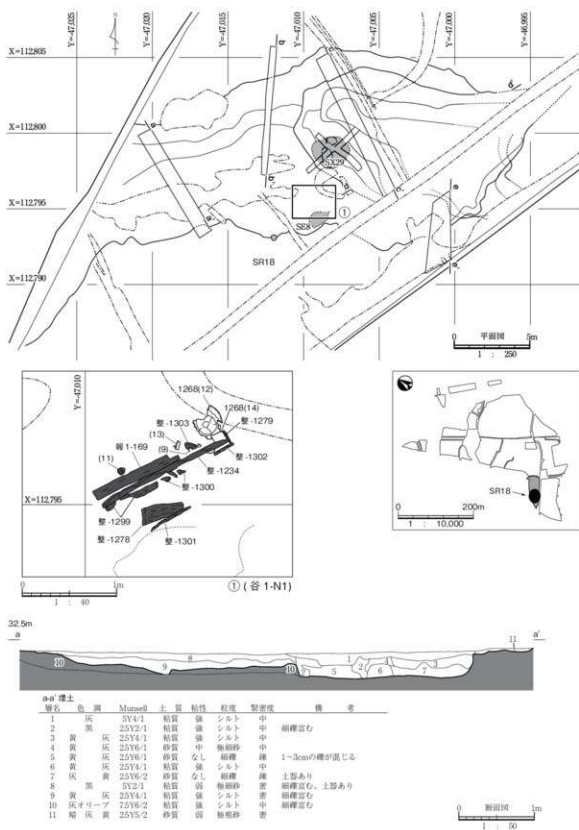


図373 SR18 平面・遺物出土状況・断面 1